

怪談の多い料理店

登場人物

◆共通

姫野小百合・静

支配人

シェフ・ド・キュイジーヌ

スー・シェフ

ソムリエ

語り部 1～6 (※木霊の語り部 1～4 は別の人が演じててもよい)

◆プロローグ

生徒

◆第1話「かまいたち」

権座

◆第2話「トイレの鼻毛さん」

ナレーター 1・2

少女 A・B

◆第3話「木霊」

弥助

◆第4話「山姥の微笑み」

上田先生

諏訪先生

山姥 1～3

◆第5話「天邪鬼」

疾風

天邪鬼 (第6話と同じ)

少女 ※静とは別の人が演じること

◆第6話「幻の森」

現実

京極葵

真行寺摩耶

鬼沢弥生

観月 茂美

※構成上、現実の登場人物4人は、第1話から第5話までの役を演じることができる。

森

天邪鬼

木霊

木の葉天狗

小豆洗い

水晶

ひすい

翡翠

めのう

風花

かげろう

やまぶき

山吹

村長

※構成上、この劇では一人が複数の役を演じることになっても差し支えない。

■プロローグ

そこは七つ森中学校・演劇部の活動場所。

活動場所には椅子が上手、下手に3脚ずつ、客席から見てハの字型に置かれている。

二人の生徒がそこに入ってくる。

そのうちの一人は浴衣を着ている。

浴衣を着ている生徒の名前は姫野小百合。

生徒 ここ。ここが演劇部の活動場所。

小百合 ありがとうございます。

生徒 でも、大変な学校に転校してきちゃったね。

小百合 大変な？

生徒 この学校、お化けが出るの。

小百合 お化けが…

生徒 ねっ、何でそんな格好してるの。

小百合 これ。

小百合がチラシを少女に渡す。

生徒 『怪談の多い料理店』何これ、変な題名。どうぞ、浴衣で観にいらしてください。

(ねっ)何で浴衣で劇を？

小百合 今日は休みだし、浴衣だと涼しげで、怪談に合ってるのかなって。

生徒 でも、何で誰もいないわけ。

小百合 (首を傾げる)

生徒 開演は？

小百合 4時です。

生徒 4時って、あとちょっとで4時だよ。(あっ)ごめん、私、用があるから、これで。

そう言って、小百合を案内してきた生徒は出ていく。

小百合は一人その場に残る。

しばらくして一人の男が現れる。

支配人 私、『怪談の多い料理店』の支配人でございます。お名前をうかがってもよろしいでしょうか。

小百合 姫野小百合です。

支配人 小百合さん。ようこそ『怪談の多い料理店』に。どうぞ、そちらの席にお座りください。

小百合が客席に座る。

支配人が手を叩く。

三人の料理人が現れる。

支配人 お客様に怪談と料理をお願いいたします。

シェフ達 (一礼をする)

シェフ それではまいりましょう。

スー・シェフ 『怪談の多い料理店』

ソムリエ 第一話

シェフ達 『かまいたち』

シェフ オードブルと一緒に楽しみください。

シェフ達が退場する。

★第一話(オードブル)『かまいたち』

舞台が暗くなり、風の音が響く。
語り部達が椅子に座る。

語り部1 深い深い森の中、風に森がざわめく。
語り部2 そのざわめきは時に女性の叫び声になる。
語り部3 昼間だというのに、森の中は靈気に満ちた闇の世界だ。
語り部4 こんな森の中を一人で歩くと、森の闇に飲み込まれそうになる。
語り部1～6 そう、ここは人外魔境の森。

客席から権座という男の叫び声。

権座 狐か…、脅かしやがるぜ。

権座が舞台上に。

権座 どれ、暇つぶしにしとめてくれようか。

権座は弓を構え、狐に狙いをつける。
語り部の一人が権座にパントマイムで斬りかかる(風を表す)。
狙いが外れ、狐は逃げる。

権座 いまいましい風だ。

語り部の一人がパントマイムで斬りかかる(風を表す)。
鋭い風に権座が倒れる。

権座 何だ、この風は。

語り部が次々とパントマイムで斬りかかる(風を表す)。
権座は叫び声を上げて倒れる。
権座が首筋を手で押さえ、その手を見る。

権座 血が出てやがる。

語り部全員が一度に権座にパントマイムで斬りかかる(風を表す)。
権座は倒れ込み、叫び声を上げてその場から去っていく。

語り部1 男の叫び声が風に乗って森を駆け巡る。
語り部2 やっとのことで森から抜け出したその時、
語り部3 更なる恐怖が男を襲った。
語り部4 男の身体には血を求めて集まった、無数の蛭がついていた。
語り部5 森は意志を持っている。
語り部6 森にまつわる数々の伝説がそれを物語っている。

●レストラン

シェフ達が登場する。

シェフ 次の怪談を紹介いたしましょう。
スー・シェフ 次に紹介するのは「学校の怪談」。
ソムリエ 舞台となるのは学校のトイレ。
シェフ 学校のトイレといえば『トイレの花子さん』
スー・シェフ しかし、私たちがそんなありふれた話を紹介するがはずありません。
ソムリエ 私たちが紹介するのは、『トイレの花子さん』の恐怖を数倍上回る怪談。
シェフ その題名は。
シェフ達 『トイレの鼻毛さん』
スー・シェフ 今日はその予告編をご覧ください。
シェフ それではまいりましょう。
スー・シェフ 『怪談の多い料理店』
ソムリエ 第二話
シェフ達 『トイレの鼻毛さん・予告編』
シェフ スープと一緒に楽しみください。

シェフ達が退場する。

★第二話(スープ)『トイレの鼻毛さん・予告編』

ナレーター1・2が登場する。

ナレーター1 トイレ、そこは異次元につながる不思議な空間。

ナレーター 2 今日もそこで数々のドラマが繰り広げられている。

二人の少女が舞台に登場し、中央でポーズをとって静止する。

ナレーター 1 そこは学校の三階西側のトイレ。

ナレーター 2 夕日を浴びてたたずむ少女 2 人。

少女 A 「一緒にトイレに行かない」

少女 B 「いいわ」

ナレーター 1 トイレに行きたい一人の少女。

ナレーター 2 それに付き添うもう一人の少女。

ナレーター 1 絆、友情、

ナレーター 2 そしてほのかな愛。

ナレーター 1・2 『トイレの鼻毛さん』

少女 A が一番目のドアをノックする。

語り部が道具を使ってノックの音を出す。

語り部 「入ってます」

ナレーター 1・2 漂う、恐怖の予感。

少女 A は二番目のドアをノックする。

語り部がノックの音を出す。

語り部 「入ってます」

少女 A 「もう我慢できない」

ナレーター 1 迫り来るそのとき。

ナレーター 2 スリル、サスペンス。

ナレーター 1・2 『トイレの鼻毛さん』

少女 A は三番目のドアに向かう。そして激しくドアをたたく。

語り部が道具を使ってノックの音を出す。

ナレーター 1 音もなく開くドア。

ナレーター 2 そこにたたずむ一人の少女。

ナレーター 1 どこからともなく吹いてくる生暖かい風。

ナレーター 2 振り向く少女。

ナレーター 1・2 風にたなびく鼻毛。

少女 B 「た、助けて」

少女 B が少女 A を突き飛ばして逃げようとするところで静止する。

ナレーター 1 裏切り、はかない友情。

ナレーター 2 そして、訪れる恐怖の連続。

ナレーター 1・2 『トイレの鼻毛さん』

ナレーター 1 鼻毛さんの正体は？

ナレーター 2 少女の運命やいかに。

ナレーター 1 愛と感動、

ナレーター 2 そして恐怖の名作

ナレーター 1・2 『トイレの鼻毛さん』。

ナレーター 2 あなたはもう

ナレーター 1・2 鼻毛さんから逃げられない。

暗転

●レストラン

シェフ達が現れる。

語り部は上手・下手とも中央の席を空けて 4 人が座っている。

シェフ 次の怪談の紹介をいたしましょう。

スー・シェフ 『怪談の多い料理店』

ソムリエ 第三話

シェフ達 『木霊』

シェフ ポワソンと一緒に楽しみください。

★第三話(ポワソン)『木霊』

語り部 1 あんたがたは千年以上の時を生きた巨木を見たことがあるだろうか。

語り部 2 われわれ人間には思いもよらない長い時間を生きた木を。

語り部 3 そんな木には精霊が宿るといわれておる。

語り部 4 確かにあの大きな大きな木を見てみると、どうしてもそんな気がしてならない。

語り部 1 木霊はそんな木の精の仕業なのだそう。

語り部 2 これはそんな木霊の棲んでいる

語り部達 森の物語。

弥助 静。

木霊(語り部達) 静(この後、下線は木霊の響を意味する。この木霊の響は、語り部が円を描くように声を重ねながら回していくと面白い)

弥助 静。

木霊(語り部達) 静。

弥助 出てくるんだ。

木霊(語り部達) 出てくるんだ。

弥助 木霊の森とはよく言ったもんだ。本当によく木霊が返ってきやがる。(再び叫ぶ) 静。

木霊(語り部達) 静。

弥助 静。

木霊(語り部達) 静。

弥助 出てくるんだ。

木霊(語り部達) 出てくるんだ。

弥助 近くにいることはわかっているんだ。

木霊(語り部達) わかっているんだ。

弥助 もうすぐ、この森はなくなるんだ。

木霊が返ってこない。

弥助 どうした。木霊が返ってこないじゃないか。

木霊(語り部達) 森がなくなる？

弥助 ！

木霊(語り部達) 森がなくなる？

弥助 どうして…

木霊(語り部達) どうして？(木霊が今まで以上に響いてくる) 森がなくなるの？ どうして？

弥助 どうして…木霊がしゃべるんだ。

木霊(語り部達) どうして？森がなくなるの？ どうして？

弥助 この森は瑠璃様のものになったのだ。瑠璃様はこの森の木で商売をするんだ。

木霊が返ってこない。
弥助はあたりを見回す。

弥助 夢か？
木霊(語り部達) 夢じゃない。
弥助 これは夢だ。
木霊(語り部達) 夢じゃない。
弥助 気が、気が狂いそうだ。
木霊(語り部達) 狂え。

弥助はさまようように森を歩いていく。

弥助 この池で顔を洗おう。少し頭を冷やさないと。

そう言って弥助は水面に映った自分の尾かを見つめる。

弥助 おい、水の中の俺。俺の頭はおかしくなったのか。
語り部達 ああ、おかしくなった(ここからは全員が合わせて言う)。
弥助 どうして水の中のお前が話すんだ。
語り部達 話すさ。俺は、この水の中で生きているんだ。
弥助 お、お前は幻だ。
語り部達 幻はお前の方だ。
弥助 俺が幻だって。
語り部達 そうさ、お前は幻だ。

弥助は狂ったように走り去る。

語り部1 しばらくして、大きな水音が聞こえてまいりました。
語り部2 満月の夜、自分の顔を水に映すと、
語り部3 その顔がしゃべり出すといわれております。
語り部4 くれぐれも、
語り部達 御用心、御用心。

暗転

●レストラン

シェフ達が現れる。

シェフ 第四話を紹介いたしましょう。

スー・シェフ 第四話は『学校の怪談パート2』。

ソムリエ 舞台は美術室。そして、その題名は。

シェフ 『美術室の鼻毛さん』

スー・シェフ などという安易な作品創りはいたしません。

ソムリエ 料理の準備が整ったようです。

シェフ それではまいりましょう。

スー・シェフ 『怪談の多い料理店』

ソムリエ 第四話

シェフ達 『山姥の微笑み』

シェフ サラダと一緒に楽しみください。

シェフ達は退場する

★第四話(サラダ)『山姥の微笑み』

美術室の中にはたくさんの彫刻が飾られている。それは語り部1～6が彫刻作品として静止することによって表す。

舞台中央には「山姥の微笑み」と題がつけられた3人の山姥の彫刻が飾られている(山姥の格好をした人が彫刻として立っている)。

上田先生と諏訪先生が舞台に現れる。

諏訪 上田先生。夜の美術室って不気味なところですね。

上田 諏訪先生、大丈夫。私がついています。

突然の雷。

雷に彫刻が青白く輝くと同時に電気が消える。

上田 停電か。

諏訪 上田先生、私、恐くて歩けません。

上田 さあどうぞ、私がおぶっていきましょう。

諏訪 恥ずかしいわ。

上田 誰も見てませんよ。

諏訪 彫刻が見ているような気がします。

上田 そんなばかなことあるわけじゃないじゃないですか。さあ、どうぞ、私の背中に。

諏訪 まあ恥ずかしい。どうしましょう。

そう言って諏訪先生が後ろを向いた瞬間、雷。

その雷に彫刻が動き出す。

諏訪 (悲鳴。その悲鳴は女性的ではなく、野太い男性的なもの)

その悲鳴にびっくりして、上田は倒れる。

上田 諏訪先生。いったいどうしたんですか。

諏訪 彫刻が動きました。

上田 そんなばかな。稲妻が作り出した幻でしょう。

諏訪 でも確かに。見てください、この彫刻生きているようじゃないですか。

諏訪先生は中央にある山姥の彫刻を触る。

上田 それは『山姥の微笑み』という彫刻です。

諏訪 『山姥の微笑み』？不気味な題ですね。

上田 作者ははじめ『マドンナの微笑み』という作品を創っていたのですが、できあがった作品はどう見てもマドンナには見えず、後で山姥の微笑みと名前を変えられたようです。

声 「ふふふふふ」

諏訪 上田先生。変な声で笑わないでください。

上田 私は笑ってません。諏訪先生、あなたこそ笑いませんでしたか。

諏訪 私が笑うはずないじゃないですか。

声 「ふふふふふ」

雷。

彫刻が動き出す。

上田 ばかな。

諏訪 上田先生、山姥が、山姥が笑ってます。

山姥達 縄がいいかい、それとも茄子がいいかい。

上田 怪談でよくあるやつだ。「赤いマントがほしいか、青いマントがほしいか」。
赤だとナイフで刺され血だらけになって死ぬ。青だと体中の血を吸い取られ真っ
青になって死ぬ。

諏訪 どっちを答えても死んでしまうなんて詐欺だわ。

山姥達 縄がいいかい、それとも茄子がいいかい。

上田 縄だと縄で首を絞められる。茄子だと…いったい何をされるんだ、想像もつか
ない。いったいどっちを選んだらいいんだ。

諏訪 縄！

上田 諏訪先生。何で縄なんて言ったんです。

諏訪 私、茄子が嫌いなんです。

上田 そういう問題じゃないでしょう。

山姥達 そうかい。縄がいいのかい。

そうやって縄を取り出す。

山姥達 ふふふふ、ふふふふ。覚悟はいいかい。

山姥は突然縄跳びを始める。

稲光、そして雷鳴が響き渡る。

シェフ達が現れる。

ソムリエ 美術室の暗闇の中、
スー・シェフ いつまでもいつまでも
シェフ 縄跳びの音が響くのであった。

暗転

●レストラン

シェフ 次の作品の紹介いたしましょう。

スー・シェフ 『怪談の多い料理店』

ソムリエ 第五話

シェフ達 『天邪鬼』

シェフ ヴィアンドゥと一緒に楽しみください。

シェフ達が退場する。

★第五話(ヴィアンドゥ)『天邪鬼』

少女とその少女を追う男・疾風が現れる。

語り部1 月の光を浴びて。少女が森の中を歩いている。

語り部2 その少女を追う男。

語り部3 二つの影が繰り広げる鬼ごっこ。

語り部4 少女は茂みの中に隠れた。(少女が、語り部の後ろに隠れる)

語り部5 その茂みに、夢のように咲く純白の野茨。

語り部6 野茨の刺が少女の肌を突き刺す

語り部1～6 白い花が少女の血で赤く染まっていく。

疾風 もう逃げられない。お前が、この近くに隠れていることはわかっている。隠れても無駄だ。血に染まった野茨がお前のいる場所を教えてくれる。

少女が音を立ててしまう。

疾風 (ふふふ)ばかなやつだ。音がお前の居場所を教えてくれたよ。野茨の甘い香りの中で、白い花を赤く染めて死ねるお前は幸せなやつだ。

男は野茨(イメージ)の中に手を突っ込む。

疾風 さあ、出てこい。出てくるんだ。

男が引きずり出したのは天邪鬼。

疾風 お前は…

天邪鬼が近づいていく。

疾風 く、来るな。

天邪鬼は更に近づいていく。

疾風 (叫び)

疾風は狂ったように逃げていく。

その時、少女が痛みに耐えかね飛び出してくる。

天邪鬼が少女の方を振り向く。鬼のような恐ろしげな顔(隈取りのようなメイクをすることが望ましい)。

少女のからだが強張り、次の瞬間ひざから崩れ落ちる。

語り部1 少女の前に立ち尽くす妖怪・天邪鬼。

語り部2 その顔は月の光に輝き、

語り部3 更に醜さをます。

語り部4 その目の前に倒れている少女は、野茨のように白く美しい。

語り部5 この美女と野獣の物語は、

語り部6 残酷な結末を迎えるだろう。

語り部下手 いいかい、満月の夜、野茨を摘みにいってはいけないよ。

語り部上手 そこには世にも醜い天邪鬼が眠っているかもしれないよ。

暗転

●レストラン

シェフ達が現れる。

シェフ 私たちが紹介する怪談も最終話を残すのみとなりました。

スー・シェフ 『怪談の多い料理店』

ソムリエ 第六話

シェフ達 『幻の森』

シェフ 色とりどりのデザートと一緒に、ごゆっくりお楽しみください。

シェフ達が退場する。

★第六話(デザート)『幻の森』

語り部1 いつもの見慣れた道、その見慣れた道が森の小道となる。

語り部2 いつもの見慣れたドア、そのドアを開けるその向こうに森がある。

語り部3 蜃気楼のように現れる幻の森。

語り部4 そこは以前は森だった。

語り部5 いつまでも、そこに存在したかったという森の意志が幻を生むのか、

語り部6 いつまでも、そこに森があってほしいという人の心が幻を生むのか、

語り部1～6 これは、そんな幻の森の物語。

暗転

舞台上から劇を中断させる合図である手を叩く音が聞こえてくる。

明かりがつくと、京極葵が舞台上に立っている。

◇学校

葵 そこまで。(客席にいる小百合に)ごめんね、せっかく観に来てくれたのに。最後まで観せられなくて。

小百合 何かあったんですか。

葵 (うん)ちょっとね。

真行寺摩耶と鬼沢弥生が舞台に現れる。ただし弥生は後ろを向いている。

摩耶 どうしたの。

葵 茂美がいなくなった。これを残して。

摩耶 退部届。

葵 まったく無責任な奴だ。

小百合 あの…、ちょっと練習を見学してもいいですか。

摩耶 演劇部に入りたいの。

小百合 前の学校で演劇部に入っていたんで。

弥生 (後ろ向きで)やめたほうがいいよ。

摩耶 弥生。

弥生 (後ろ向きで)あたしが弥生？

そう言った後、突然振り向いた弥生の顔は般若の顔。

摩耶 (叫び声)

弥生が般若のお面をとる。

弥生 驚いた？

摩耶 も一。

小百合 一つ、質問してもいいですか。

葵 どうぞ。

小百合 この学校にお化けが出るって本当ですか。

葵 残念ながら本当だ。

弥生 七つ森中学校七不思議。

摩耶 夜動き出す美術室の彫刻。

弥生 閉め切った教室に突然吹く風。

摩耶 スピーカーから流れてくる呻き声。

弥生 誰もいない家庭科室から聞こえてくる、何かを洗う音。

摩耶 女の子を捜して回る透明人間の声。

弥生 トイレに現れる鼻毛の長い女の子。

摩耶 そして、学校の中に現れる幻の森。

小百合 幻の森…

葵 最終話で扱ったのは七つ森中学校の7番目の不思議なんだ。『怪談の多い料理店』はこの七不思議と七つ森に昔から伝わる伝説をミックスした作品なんだ。

小百合 『幻の森』ってどんな話なんですか。

葵 最終話の『幻の森』では学校に突然森が現れる、そして、森とともに様々な妖怪が現れる。最後はすべての妖怪が退治される。そして学校に平和が訪れる。

小百合 それが怪談なんですか。

葵 『怪談の多い料理店』上演の本当の目的は、怪談で観ている人を怖がらせることじゃないんだ。風評被害は恐ろしい。今、七つ森中学校はお化けが出るっていう噂が広まりつつある。生徒会長の私はそれが許せなかった。学校に妖怪が出るなんて許しちゃいけない。それがこの劇を通して私が伝えたいことだ。

茂美が部屋に入ってくる。

葵 茂美…

茂美 …

摩耶 どうしてやめんのよ。

茂美 妖怪なんて子どもだましの劇に耐えられなくなったの。私は、リアリズム演劇がやりたくて演劇部に入った。現実を鋭く抉るような劇がやりたくて。

葵 妖怪も現実だ。

茂美 あなたとわかり合うのは無理ね。とにかく私は今日限りで退部します。

小百合 あの…

葵 何？

小百合 私、決めました。演劇部に入部します。

葵 本気？

小百合 はい。

茂美 私と入れ替わりで入部者が出てよかったじゃない。それじゃがんばってね。

茂美が出ていく。

葵 (小百合に) 名前は？

小百合 姫野小百合です。

葵 私は部長で生徒会長の京極葵、(握手を求めて) よろしく。

二人が握手をする。

葵 小百合さん、(台本を示して) 劇に出てみないか。

小百合 いいんですか？

葵 この台本を貸すから、あいつがやる予定だった静って少女の役をやってほしい。

小百合 静…

葵 静は鬼の娘。

小百合 鬼の…

葵 七つ森には『一人^{ひとりしずか}静』という伝説があるんだ。

小百合 『一人静』？

葵 静は、人間でありながら鬼に育てられた。そして、村人達を苦しめた。最後は村人達によって殺されてしまう。彼女が死んだ場所には毎年、一人静という花が一面に咲くんだ。

弥生 そうだったの？でも、そんな結末劇にはなかったけど。

葵 妖怪の仲間を美化するようなきれいな結末にしたくなかった。

小百合 私、やってみます。

葵 (台本を指して) それじゃ、このシーンの本読みからやろう。

小百合 はい。「天邪鬼、私は、あなたが、好き」

葵 だめだめ、静が天邪鬼という妖怪を自分の味方につける時、妖怪よりも強い魔力を使って天邪鬼をたぶらかすシーンなんだ。もっとも悪を背負って、言えないかな。

小百合 「天邪鬼、私は、あなたが、好き」

その時、呻き声のような不気味な音が響いてくる。

葵 これだ。七つ森中学校七不思議、スピーカーから流れてくる呻き声。

声 静。静。

葵 そして、女の子を捜して回る透明人間の声

小百合 葵さん、台本にそんな台詞ありません。

葵 これは、劇じゃない。

小百合 （えっ）

突然風が吹き、弥生は倒れる。

弥生 何なの、この風。

再び風が弥生を襲う。

弥生 痛っ！何なの、この風、何なの。

葵 閉め切った教室に、突然吹く風。

弥生 （手に血がついているのに気がついて）血、血が出てる。これって本物の血…

弥生が倒れる。

葵 弥生。

声 静。静。どうしたんだ、静。

葵 学校に妖怪が出るなんて許しちゃいけない。

葵がCDを取り出す。

葵 こいつを聞かせてやる。

葵がCDをかける。

CDからは何の音も聞こえない。

摩耶 何も聞こえない。

葵 妖怪には聞こえているはずだ。

どこからともなく呻き声が響いてくる。

葵 摩耶、ドアを開けて。

摩耶がドアを開ける。

舞台が静かになる。

極 人間には聞こえず、妖怪だけに聞こえる音を流したんだ。今、その効果が確かめられた。

その時、弥生がゆっくり起き上がる。

小百合 大丈夫ですか。

弥生[天邪鬼] (小百合の手をつかんで) 静。

小百合 何言ってるんです。私は姫野小百合。

弥生[天邪鬼] 静、ここにいるのか。俺は人に移ると何も見えなくなってしまうんだ。

小百合 弥生さん。しっかりして。

弥生[天邪鬼] 静、こいつを起こしちゃいけない。こいつが起きてしまえば、俺はこいつの中にいられない。こいつの中にいればあの音を聞かないで済むんだ。

小百合 弥生さん。

弥生[天邪鬼] 静。どうして俺のことがわからない。俺だ、天邪鬼だ。

葵 天邪鬼…

摩耶 どういうこと。

葵 弥生に天邪鬼という妖怪が移ったんだ。

弥生[天邪鬼] 静、どうしたんだ。

葵 小百合、静を演じろ。

小百合 でも、私、まだ台本を読み終えてません。

葵 小百合、これは劇じゃない。お前が演じる静は、この台本の静とは違う。お前は、すべての記憶をなくした静という少女。時間をかせげ、時間をかせげばこいつを退治する方法が分かるかもしれない。

弥生[天邪鬼] 静、何を話しているんだ。

小百合 私、何も覚えてない。

弥生[天邪鬼] あの日のことまで忘れたのか。

小百合 あの日？

弥生[天邪鬼] そう、俺がお前に出会ったあの日。

小百合 あの日…

弥生[天邪鬼] 静。目をつむるんだ。そして俺の声に集中するんだ。

小百合 …

弥生[天邪鬼] あの日には血のように赤い満月の輝く夜だった。

天邪鬼が登場。

弥生・天邪鬼 （二人の声が重なる）野茨の甘い香りが立ち込める森の中で俺はお前に出会った。

天邪鬼 そして、お前は俺を見ると、崩れるように倒れこんだ。

暗転

◆森

明かりがつくとそこは森(ただし背景は演劇部部室と同じ)。

語り部が四人、椅子に座っている。

舞台中央で少女が倒れている。

その少女が気がつく。少女の名前は静(静を演じるのは小百合)。

静 ここは？

木霊 ここは？(語り部達が下線部を木霊の響として返す)

静 ここはどこ？

木霊 ここはどこ？

静が木霊の存在に気がつく。

木霊 気がついたかい。

静 あなたは？

木霊 僕は木霊。

静 木霊？

木霊 そう、木霊さ。

静 あなたが助けてくれたの。

木霊 僕は何もしてない。君を助けたのは天邪鬼さ。

静 天邪鬼？

木霊 (うなずく)

静 どこにいるの？

木霊 (天邪鬼を指差す)

天邪鬼は舞台隅に後ろ向きに座っている。

静が天邪鬼に近づく。

静 あのだ。

天邪鬼が振り返る。

静 ！

天邪鬼 びっくりしたか。お前は俺を見て気絶したからな。どうした、また気絶するか。俺ほど醜いものはこの世に存在しないからな。

静 ごめんなさい。

天邪鬼 謝ることなんかない。人間という人間はみんな俺を見て恐れ、悲鳴を上げ、気絶する。そんなことは慣れっこになってしまった。だから正直に言えばいい。俺は醜いとな。へどが出るほど醜いとな。

静 ありがとう。

天邪鬼 …

木霊 ありがとう。

静 助けてくれてありがとう。

木霊 ありがとう。

天邪鬼 木霊、ふざけるのはやめろ。

木霊 天邪鬼、そんなに天邪鬼になるのはやめなよ。

天邪鬼 俺は天邪鬼だから天邪鬼なのさ。

木霊 この娘をここに運んできたのは誰だい。野茨の刺を一つ一つ抜いてあげたのは誰だい。傷口にオトギリソウとチドメグサを塗り、熱を冷ますためにキランソウをすりつぶして飲ませたのは誰だい。

静 そんなことまで…、ありがとう、天邪鬼。

天邪鬼 ふん、こんな醜い俺に感謝するなんてお前はきっと大馬鹿だな。

静が天邪鬼に近づいていく。

そして天邪鬼の手を取ってキスをする。

天邪鬼 …

静 父の国の、感謝を表す作法です。

天邪鬼 本当に俺が怖くないのか。

静 なぜ怖がる必要があるんですか。

天邪鬼 俺は妖怪だ。妖怪の中で一番醜い天邪鬼だ。

静 暫くここにおいてもらえませんか。

天邪鬼 …

静 私にはもう帰る場所がないんです。

風が吹く。

木霊 風だ。

天邪鬼 木の葉天狗が来る。そこに隠れていな。あいつは人間が大嫌いなんだ。

静が隠れる。

風とともに木の葉天狗が現れる。

天邪鬼 木の葉天狗。今日はずいぶん強い風を吹かせていたが何かあったのか。

木の葉天狗 ああ、この森に怪しげな男がいたから、かまいたちを食らわしてやったよ。

天邪鬼 それでその男はどうなった。

木の葉天狗 かまいたちを食らって、体中血だらけ。そして、その血を嗅ぎつけた蛭が体中を覆い尽くした。

天邪鬼 実は、俺もおかしなやつに会った。そいつは俺のことを少女と間違えて叫び声をあげて逃げていった。

木の葉天狗 お前のことを少女と間違えただって。そいつはお笑いだ。

木霊 実は、僕もおかしなやつに会ってるんだ。そいつがとても気になることを言ってた。

木の葉天狗 気になること？

木霊 この森がもうすぐなくなるって言うんだ。

木の葉天狗 森がなくなる。

木霊 男はこう言っていた。(弥助の声)「この森は瑠璃様のものになったのだ。瑠璃様はこの森の木で商売をするんだ」。

木の葉天狗 瑠璃様…そいつは何者だ。

木霊 わからない。小豆洗いがその男の後をつけてるよ。

木の葉天狗 小豆洗いが。

木霊 そいつは僕に脅かされた後、川の中にドッポーン。どうも気になったんで小豆洗いに後をつけてもらったのさ。

暗転

◇学校

明かりがつくとそこは演劇部部室。

弥生[天邪鬼] だめだ。もう続きを話せない。こいつが目を覚ます。こいつが目を覚ます
と俺は乗り移っていることができない。

葵 チャンス到来。天邪鬼が弥生のからだを離れた時がこいつを倒す時だ。

弥生[天邪鬼] だめだ、もうこいつのからだに入っていられない。

弥生が倒れる。

葵 天邪鬼が弥生から離れたぞ。よし、もう一度あの音を聞かせてやる。

葵がCDをかける。

天邪鬼の苦しむ声。

葵 苦しめ。

その時、ドアを開けて茂美が入ってくる。

それと同時に、苦しみの声が消える。

葵 茂美。何で戻ってきた。

茂美 これを返しに来たの(そう言って台本を渡す)。

葵 後少しで天邪鬼を退治できたのに。

茂美 天邪鬼？まだそんな現実離れした事言ってるの。

小百合 本当に妖怪が出たんです。

弥生がゆっくり目を開ける。

弥生 あー、妖怪に取り憑かれる夢見てた。

葵 夢じゃない。現実だ。お前は、妖怪に取り憑かれていたんだ。

弥生 あたしが…

茂美 いいかげんにして。妖怪って何？これだからあなたたちと劇をやるのが嫌なの。それじゃ、今度こそ本当にさようなら。

茂美が出て行く。

葵 あと少しだったのに。

茂美の叫び声が聞こえてくる。

葵 茂美の声だ。

みんな、教室から出て行く。
しばらくして茂美が部室に連れてこられる。

葵 妖怪に出会ったんだ。これでわかったろう、この学校に妖怪がいるってことが。

ゆっくりと茂美が立ち上がる。

葵 気がついたか。

茂美[天邪鬼] (小百合の手をつかんで) 静、静。

小百合 (えっ? !)

葵 天邪鬼のやつ、茂美に乗り移ったのか。

茂美[天邪鬼] 静、思い出したか。

小百合 …

茂美[天邪鬼] まだ思い出せないのか。悪い人間に記憶を消されたんだね。(茂美自身を指して) こいつも悪い人間の仲間だろ。しかし、俺がこいつに取り憑いている間は、誰も俺に手出しはできない。静、思い出すんだ。消された記憶を。

摩耶 またあの音を聞かせたら。

葵 だめなんだ。

摩耶 どうして。

葵 人間に乗り移った妖怪には、人間の耳を通した音しか聞こえない。茂美が目覚めますまで待つしかないんだ。

茂美[天邪鬼] 静、思い出したか。

小百合 だめ。

茂美[天邪鬼] …続きを話そう。

小百合 …

茂美[天邪鬼] 木の葉天狗にかまいたちを食らった男。木霊と小豆洗いにからかわれた男。そして、俺を見て逃げ出した男。

天邪鬼が現れる。

茂美・天邪鬼 森の中に現れたおかしい人間たち。そいつらは何者なのか？

天邪鬼 それは小豆洗いによって明らかにされた。

暗転

◆森

明かりがつくとそこは森。
舞台上に天邪鬼、静、木霊、木の葉天狗がいる。
小豆洗いが慌てた様子で現れる。

小豆洗い 大変、大変だよ。
天邪鬼 落ち着け、小豆洗い。
小豆洗い これが落ち着いていられるか。
天邪鬼 お前はいったい何を見てきたんだ。話を聞かせろ。
小豆洗い わかった。

小豆洗いは、語るまねをする。
小豆洗いの後ろに、彼が語る瑠璃、村長、山吹、風花、蜚蜋が登場する。

山吹 瑠璃様の言いつけどおり、村の家畜を殺し、殺された家畜のそばに赤い毛を残しておきました。
風花 村人はそれを見て逆上し、赤鬼退治に出かけました。そして、見事、赤鬼をしとめました。
瑠璃 村人は一つにまとまったということだね。村長。
村長 はい、見事に。おかげで私の行っている不正に目を向けるものがいなくなりました。
瑠璃 人をまとめるには憎しみが一番。
村長 なるほど。
瑠璃 それでは約束どおりあの森はいただいたよ。
村長 お好きなように。
蜚蜋 瑠璃様、あの鬼に矢が刺さった瞬間 真っ赤な血が吹き出しました。瑠璃様、鬼の血も私たち人間と同じ赤なのですね。
瑠璃 あいつらは人間だよ。海からやってきた人間さ。赤い髪に青い目、われわれより一回り大きいからだそして、妖しい言葉を操る。はじめて見る者にとっては、鬼にしか見えない。
山吹 あの娘の静は鬼には見えません。
瑠璃 静は、私たちが襲った五つ森の生き残りだ。それをあの鬼達が育てたんだ。皆殺しにしたつもりが、生き残っていたとは、しぶとい娘だ。それで静はどうなっ

たんだい。

風花 森に逃げ込みました。

瑪瑙 森に。

風花 静を追いかけたもの達がみな不思議な目にあっております。

瑪瑙 どのような？

風花 権座はかまいたちに遭い身体中傷だらけ、おまけにその傷口に無数の蛭が取り付き血を吸われ

山吹 弥助は木霊が自分の声を返すのではなく、ものをしゃべりだしたと。

蜉蝣 疾風は静を追いつめはしたが、静だと思い引きずり出した者が二目と見られな
い化け物だったと申しております。

瑪瑙 それは、森に棲む妖怪どもの仕業だね。

風花・山吹・蜉蝣 いかがいたしましょう。

瑪瑙 あの森の木を伐採するときに、妖怪がいるとなにかと面倒だ。私の娘の水晶と翡翠を呼ぶとしよう。二人は妖怪を退治する専門家。きっと見事に退治してくれることだろうよ。

笑いながら瑪瑙達が退場する。

すすり泣きが聞こえてくる。

木の葉天狗 誰だ。(静寂)出てこい。(静寂)出てこないなら。こうだ。

木の葉天狗が風を吹かせる。

その風に押し出されて、静が木の葉天狗の前に。

木の葉天狗 人間か。どうして人間がこんな所にいるんだ。

静 …

木の葉天狗 怪しいやつめ。俺のかまいたちをお見舞いしてやる。食らえ。

その瞬間、天邪鬼が静の前に立ちかまいたちを受ける。

天邪鬼が倒れる。

木の葉天狗 天邪鬼。人間嫌いのお前がなぜ。

木霊 この娘はあいつらの仲間じゃない。この娘はあいつらに追われていたんだ。

木の葉天狗 小豆洗いの話に出て来た静という娘はこいつか。

天邪鬼 そうだ。

木の葉天狗 こいつは人間だ。それをわかって、お前…

天邪鬼 …

木の葉天狗 馬鹿なやつだ。

静は泣いている。

静 殺されたんですね。父と母は殺されたんですね。

木の葉天狗 そういうことになるな。

静 それなら、あなたのかまいたちで私を切り刻んでください。父と母がこの世のものでなくなった今、生きている望みは、ありません。

木の葉天狗 …

静 お願いします。私を切り刻んでください。

木の葉天狗 お前と同じ人間がお前を苦しめ、妖怪がお前を助ける。不思議なもんだ。

静 …

木の葉天狗 お前の代わりに俺のかまいたちを食らった、馬鹿な天邪鬼の奴を看病してやれよ。

静 …

木の葉天狗 こんな所に長居は無用。俺は立ち去るとしよう。今日は空を飛ぶには最高の月夜だ。

小豆洗い さいなら。

木霊 さいなら (木霊が響く…この場面では声は袖から響いてくる)。

木の葉天狗、木霊、小豆洗いが帰って行く。

静 ごめんなさい。

天邪鬼 何のことだ。

静 私の代わりに。

天邪鬼 これしきのことなんともないさ。

天邪鬼が立とうとしてうめき声をあげる。

静 今度は私が看病する番ね。

天邪鬼 看病なんて要らない。こんな傷すぐ治る。

静 看病させて、天邪鬼。

天邪鬼 …

静 星がきれい。父さんと母さんはきっと星になって私を見つめてくれてるわね。

天邪鬼 あそこに冠の形をした星の集まりがあるのが見えるだろ。

静 ええ。

天邪鬼 俺はよく夢に見る。あの星の冠を頭に載せたとたん美しい姿に変わることを。
しかし、夢は夢。水面に映し出される俺の顔はいつも醜いままだ。

静 天邪鬼。あなた、醜くなんかない。

天邪鬼 気休めを言うんじゃない。自分のことは自分が一番よく知っている。

静 いいえ、あなたは自分のことをちっとも知らない。あなたはあなたの美しさに
気がついてない。

天邪鬼 俺に美しさなんかない。俺は醜い嫌われものだ。

静 あなたは嫌われものなんかじゃない。

天邪鬼 いや俺は嫌われものだ。世界中の誰がこんな醜い俺を好きになるっていうんだ。

静 私は、あなたが好き。

天邪鬼 俺が好きだって？冗談はやめろ。俺を好きになってどうするんだ。(沈黙)

人間の物語には、醜い蛙や恐ろしい野獣が美しい女性の愛によって王子様に戻り、最後にめでたく結ばれるという話があるそうだな。要するにどんなに醜くても結ばれるのは王子様、魔法で醜い姿にさせられた王子様なんだよ。それじゃあ俺はどうだ。俺は魔法でこんな姿になっているとでも思っているのか。いや違う。魔法なんてかかっちゃいない。これが俺の本当の姿なんだ。俺は王子様にはなれないんだ。

静 王子様になんてならなくていい。そのままでいいの。

天邪鬼 なぜ。

静 私の父と母も見かけから差別を受けた。赤い髪に青い目。そのために鬼として殺された。二人ともとても優しくかったのに、この世で一番優しくかったのに。

天邪鬼 …

静 天邪鬼、私は、あなたが、好き。

暗転